

言語干渉のとらえ方

菅田茂昭

1. はじめに

ある話者が母国語に加えて新しく外国語を学んでこれを使用するとき、これらの二つの言語は接触する (in contact) といわれる。そしてその人は bilingual, 2言語を使用すること自体は bilingualism¹⁾ と呼ばれている。

さて外国語を学ぶことの最終的な目標がその外国語を母国語としている人と同程度に理解したり表現したりすることだとすれば、まさに Bloomfield のことばにあるような(注²⁾を参照) bilingual な人間になることだといえる。しかし実際にはそのような状態に達することは容易ではない。自称 bilingual であっても観客的にはいろいろの段階があつて²⁾、完全な bilingual など考えられないほどである。その理由は外国語を学ぶ大抵の大人が経験するように、外国語を子供が母国語を学ぶときのように覚えようとしてもすでに身についた母国語の習慣がかえって妨げとなる場合があるからである。つまり学ぼうとする積極的な力に対してこれにブレーキをかける力が働くわけである。

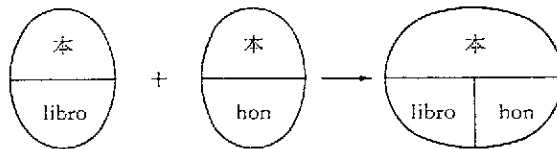
そこでこの妨げとなる原因をつきとめ、これを未然に防ぐことができ

1) bilingualism は L. Bloomfield により “2言語の本国人並みの使用” と定義されたが、(Language, 1933, p. 56.) のち E. Haugen は “外国語で完全な発話を行なう能力” の意味に拡大して用い (The Norwegian language in America, 1953 vol. 1, p. 7.)、さらに現在ではたとえば W. F. Mackey は “同一の話者が2カ国語以上を相互に用いること” としている (The description of bilingualism [The Canadian Journal of Linguistics, 1962-7:2, p. 52])

2) たとえば発音上のなまりが観察される場合、発音は上手だが、文法を充分に習得してない場合、外国語で話しはできるが書けない場合、あるいはイタリア語で2人称 tu (きみ) では話せるが、敬称 Lei (あなた) [文法的には3人称] への切りかえが下手な場合など。

ば外国語の学習もより経済的に行なわれるはずだと考えられる。この問題に言語学的に取り組もうとするとき (a linguistic approach), 指針となるのが母国語と外国語との対照研究 (contrastive studies) である。

もちろん母国語が妨げになるといっても母国語のすべてがそうであるというのではない。母国語を知っているために外国語の学習が母国語に要したものよりより少ない努力で行なわれるからである。とくに人が伝達活動において用いる音にはある程度の領域があって、言語が異なっても音には overlap するもののがかなりある。E. Haugen は2カ国語を知ることは1カ国語よりも多く、2カ国語の和よりも少ないものを学ぶことであるといっている³⁾。そして overlap する部分が少なければ少ないほど、その外国語の習得は楽であり、逆に overlap する部分が多ければ多いだけ、その外国語の習得はむずかしくなるのである。これは記号学的にも興味ある現象である。F. de Saussure によれば、言語記号は音と概念映像との結びついたものと定義されるが、この場合もし概念すなわち意味の世界がある程度 universal だと仮定すれば、人は二つのことばを覚えるのではなく、一つのことばの何種類かの表現手段を増やすに過ぎないことになる。たとえばイタリア語話者が日本語を学ぶ場合は次の図のような関係におかれる。



2. 言語干渉とは

二つの言語が接触するとき overlap する部分とズレる部分の有無が問題となる。干渉は後者と関係する現象である。

3) Language contact [Actes du Huitième Congrès International des Linguistes, Oslo, 1958, p. 772]

Weinreich は言語干渉とは“二つの言語が接触して、どちらでもよい、その一方が本来のノルマからズレることである”と述べている⁴⁾。しかしここでは語学教育の立場から“母国語(第1言語)に属する習慣を外国語(第2言語)を話したり書いたりする際にもち込むこと”⁵⁾と考えておく。

たとえばイタリア語を母国語とし、日本語を外国語とする場合、イタリア語的要素が日本語のなかへもち込まれる。つぎの例はイタリア語の名詞の性・数に関する屈折を日本語に導入したものである。(非日本語的形式は *印を付して示す。)

un vestito (1 着の服)	→	ichimaino kimono (1 枚の着物)
due vestiti (2 着の服)	→	nimaino *kimoni (2 枚の着物)
una donna (1 人の女)	→	hitorino onna (1 人の女)
due donne (2 人の女)	→	futarino *onne (2 人の女)

なおここで注意しておきたいことは、このような干渉が起こる場合、元のイタリア語はもちろんのこと日本語全体(社会的な制度としてのラング)が変化をこうむることもないということである。*印を付した干渉の例はあるイタリア語話者個人の発話にのみみられるものである。この意味で Saussure の用語を用いれば、干渉はパロールにおける問題である。(かりに日本語全体が *印のような形式の影響を受けることになれば、すでに借用と呼ぶことのできる現象である。)

3. 言語干渉のとらえ方

さきほどの *kimoni のような干渉例は学習の初期にしばしば気付く現象であるが、これはいわば一種の病気にたとえることができる。その病原、症状、治療法などを知れば不治の病でもない。

まず二つの言語を比較・対照しながら観察することによって問題点を予

4) V. Weinreich: Languages in contact, The Hague, 1964, p. 1.

5) W.F. Mackey: Ibid., p. 68.

測することができる。そして干渉が具体的にどのような起こり方をし、どんな影響を及ぼすかを知ることができれば、語学教育のためにも有用な手段となる。このような観点から以下言語干渉のとらえ方について考察したい。概略を表に示しておこう⁶⁾。

外国語学習における言語干渉			
とらえ方→ レベル ↓	母国語における 型 (model)	外国語における 代用 (replica)	その影響
i) 文化			
ii) 意味			
iii) 語い			
iv) 文法			
v) 音韻			
vi) 正書法			

言語干渉は伝達手段(話しことば、書きことば)、スタイル(会話体、演説体など)、伝達領域(話し相手)、場面などによって起こり方は一様ではない。たとえば外国語で演説する際には語いよりも syntax における干渉が多いのに反し、飲み友達との会話では語いにおけるものが増える傾向にある。

さて外国語学習における言語干渉の具体例をとらえる第一歩は学習者の外国語のなかに非外国語的要素を探すことである。すなわち母国語のどの要素が型 (model)⁷⁾ になってとりいれられているかを知ることである。Model には表のようにいくつかのレベルが考えられる。さらに model は /s/ のような単位である場合と /st/ のようにその連結である場合とがある。

つぎに model となった母国語の要素をその干渉によって生じた外国語における代用 (replica)⁸⁾ と比較する。その結果、外国語がどのようにゆがめられ、代用されているかを知ることになる。もし外国語の単語が発音が母国語式になったとすればレベルをズレた代用であり、またもし英語の文

6) 表の作成にあたっては W. F. Mackey: Ibid., p. 72. を参照した。

7), 8) いずれも E. Haugen の用語。

“I don't know”を外国人が aironno のように1語として受け取るときは単位とその連結との代用である。

では表にしたがってとくに日本語を学習するイタリア話話者(あるいは逆にイタリア語を学習する日本語話者)を中心に問題点を若干拾ってみる。

i) 文化レベルの干渉——イタリア話話者にとって「柿」,「着物」,「芸者」などはすでにイタリア語に借用されているが,「餅」,「銭湯」,「みこし」などはまったく新しい現象となる。ただしこれは言語外的な接触であり,文化のレベルの干渉の原因をなす。

同様に行動(あいさつなど)の相違も新しい経験となる。日本語の「おはよう」,「こんにちは」にたいしてつねに“Buon giorno”を用いたり,また日本語の「どうも」のように数種類の場面で通用する表現をもたないイタリア話話者は日本語で新しい経験を要求される。

この類の干渉は食事の際イタリア人が日本料理をライス(イタリアではスープの部類に属す)を食べ終わってから他の料理にはしをつけるのにたとえられる。

ii) 意味レベルの干渉——類似の現象・経験が母国語と外国語とでは異なった分節をされることに起因する。色の区分はその古典的な例である。日本語の「青空」,「青葉」,「青信号」における「青」は,イタリア語でも英語と同じく blu(青)と verde(緑)とに分かれる。したがって「みどりの窓口」にならって「みどり信号」の例が生じうる。また日本語の「教諭」,「教授」はイタリア語とは表のように対応するため,日本語話者はイタリアの高校教諭は“professore”と呼ばなければならない。しかし日本語の「先生」はすべての場合に当てはまるので,これでイタリア話話者にとっての困難は減少する。

ドイツ話話者が“Winter steht vor der Tür.”をもとに,英語で“Winter is around the corner.”の代わりに“Winter is before the door.”として,母国語をもとに対応する外国語の単語を並べて文をつくるのもこのレベルの干渉である。

小学校教諭	maestro
先生	
中学・高校教諭	professore
大学教授	

iii) 語いレベルの干渉——英語を学んだ日本語話者が日本語を話す際英語の語句を一時的にそのままとりいれて用いることはよくある。英語の“week-end”をそのまま借用する代わりに「週末」、フランス語の“fin de semaine,” イタリア語の“fine settimana”のように意味借用 (semantic borrowing) するのはこのレベルの干渉への抵抗のあらわれである。

iv) 文法レベルの干渉——母国語の文法範ちゅう、品詞、語順の習慣を外国語にもちこむことである。*kimoni はイタリア語話者が文法的“数”をこれをもたない日本語にもちこんで生じた例である。日本語の「リンゴ」はイタリア語では木を指す場合は男性名詞 melo, 実を指す場合は女性名詞 mela として表わされる。この習慣がかりに日本語にもちこまれるとすると, ringo, *ringa が考えられなくはない。しかし文法的性が負担となるのはむしろこれをもたない日本語話者においてであって、イタリア語では動物名まで「キリン」は女性, 「ゾウ」は男性, 「サル」は女性といったぐあいに覚えなければならない。人称についていえば、イタリア語の人称による動詞の語尾変化こそ日本人にとっての負担となる。

とくにイタリア語の冠詞はこれをもたぬ日本語話者がイタリア語で落としがちな品詞である。

日本語話者にとって負担となるイタリア語の文法現象のいま一つは指示代名詞であろう。たとえば「これは...です」の「これは」に当たる語が、英語やフランス語では this, these; ce, ces のように被指示物の単・複を示すのに加えて、イタリア語ではつぎのようにその文法的性をも示すことである。

Questo è un libro.	これは (<i>m. s.</i>) 本 (<i>m. s.</i>) です。
Questa è una penna.	これは (<i>f. s.</i>) ペン (<i>f. s.</i>) です。
Questi sono libri.	これは (<i>m. pl.</i>) 本 (<i>m. pl.</i>) です。
Queste sono penne.	これは (<i>f. pl.</i>) ペン (<i>f. pl.</i>) です。

語順に関しては、とくにイタリア語の場合は一概にいえませんが、原則としてはイタリア語も他のヨーロッパの諸言語と同じく *regressive* であり、*progressive* な日本語と対照される。

(イタリア語)	<u>quella donna</u>	<u>che ho incontrato</u>	<u>ieri</u>	<u>non</u>	<u>vado</u>
	あの 女	会った	きのう	ない	行か

(日本語)	<u>きのう</u>	<u>会った</u>	<u>あの女</u>	<u>行か</u>	<u>ない</u>
-------	------------	------------	------------	-----------	-----------

最後に日本語とヨーロッパの諸言語とを比較するとき問題となるのが主語の有無である。日本語に主語のない文(潜在的な主語はべつとして、形式的には)が存在するという意味ではイタリア語にも主語のない文が存在する。ただしイタリア語では定形動詞がすくなくとも主語(潜在的)の人称と数を示す。両言語に共通して主語は文の形成のために充分条件ではあるが必要条件ではないといえることができる。

v) 音レベルの干渉——調音、音節の区切り, *junction*, アクセント, リズム, イントネーションなどにわたる。

イタリア語話者の日本語の「ウ」はよく観察すると上下左右からつばめ前へ突出されて必要以上に円められている。日本語話者はイタリア語の /A/ をしばしば /U/ で代用する。また [s], [z] は日・伊両語に見られるが、とくに *phonemic* な対立を経験しないイタリア語話者にとって「すす(煤)」と「すず(錫)」は負担となる。

日本語話者がイタリア語の *Prato* /ccvcv/ を *Purato* /cvcvcv/ とするのは日本語の音節構造の干渉である。

イタリア語の “a letto” (百グラムにつき) と “a letto” (ベッド) とは冠詞をもたぬ日本語話者にとって単独では juncture の区別が困難である。

イタリア語の強さ (stress) アクセントにたいし、日本語は高さ (pitch) アクセントをもつが、リズムは両言語とも syllable-timed (各音節の発せられる時間が等しい) であり、stress-timed (強アクセントが音節数に関係なく等しい時間的間隔をおいて起こる) な英語などに対照される。

高さ音素の連結からなるイントネーションはかなり universal な現象であり、日・伊語間においてもとくに問題はない。

vi) 正書法レベルの干渉——1例をあげれば、イタリア語話者がイタリア語の omaggio (敬意), comunicazione (伝達) にならって、英語で *homagge, *communication とするのはこのレベルの干渉である。

以上は具体的な干渉例を個別的に指摘したものであるが、干渉における代用にはいくつかの類型が考えられる。

たとえば音の分野に限ると、U. Weinreich は四つの類型をあげている⁹⁾。日・伊両語に例を求めると、

i) Under-differentiation of phonemes——イタリア語の /l/ と /r/ を日本語話者が一様に /r/ としてとらえる場合。

ii) Over-differentiation of phonemes——逆にアクセントのある音節で /e/ と /e/ の区別をもつ特定地域のイタリア語話者はこの区別のない日本語にまでこの習慣をもちこむことがある。

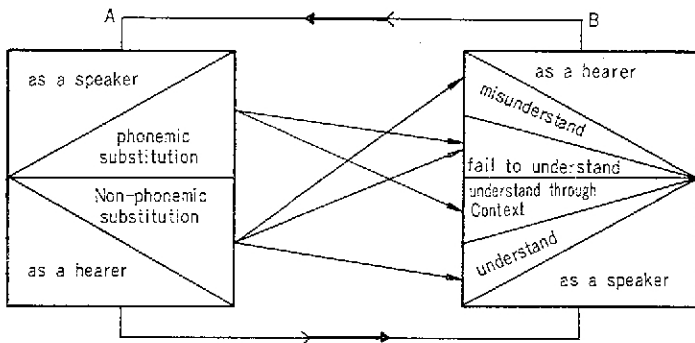
iii) Reinterpretation of distinctions——外国語で必要な区別を母国語をもとに再整理すること。ドイツ語話者が英語の語頭の破裂音を帯気・無声化して building を [p^hildɪŋ] と発音する場合。

iv) Actual phone substitution——以上の三つの phonemic な干渉に加えて、これは phonetic な干渉である。たとえばイタリア語話者が日本語の「ウ」を強く円める場合が該当する。

9) U. Weinreich: Ibid., p. 18.

4. 干渉の処理

これまでに述べてきたような方法で教えるべき外国語と学生の母国語との干渉例を収集していくと、表のなかのどの項目が干渉の密度が高く教育上の問題点を含んでいるかを知ることができる。しかし最後に注目すべきことは干渉の質(あるいはその影響)である。干渉のなかにも矯正の要求度が高いものと、見逃しても伝達をそこねるまでにはいたらないものなどの段階が考えられる。参考までにつぎの図を再録¹⁰⁾させていただく。



この図は Prator の報告¹¹⁾にもとづき筆者が作成したものであるが、例えば、A (speaker としての) が phonemic substitution を犯すと、B (hearer としての) は A を理解しえない (fail to understand) 場合と、context から理解する (understand through context) 場合とがあるという関係を示している。

なお最後に言語干渉の矯正について H. A. Gleason のことば¹²⁾を紹介しておきたい。

“The phonologic problems in learning a second language are largely

10) cf. 菅田：外国語の発音教授：応用言語学的方法 [早稲田大学語学教育研究所紀要 (1), 1962, p. 65.]

11) Manual of American Pronunciation, 1957, p. xi~xiv

12) H. A. Gleason: An Introduction to Descriptive Linguistics. Revised Ed. (1961) p. 346.

those of learning new uses for old sounds rather than learning new sounds.”

(外国語を学ぶに際して、音韻論的問題はほとんど新しい音を学ぶことよりもむしろ既に習得した音の新しい用法を学ぶことである。)

そして彼はこのような理由から、つぎのような指導法を示唆している。

“The problem may be stated as that of disassembling the students' speech patterns into allophones, and of reassembling the allophones into new units, perhaps adding a few in the process.”

(問題は学生の speech patterns を allophones に分解し、これらの allophones を再集あるいは同時に多少付け加えたりして、新しい単位を作ることであるということが出来る。)

参考書(国内のものは省略)言語の比較・対照研究あるいは干渉に関する入門書としては、R. Lado: *Linguistics across Cultures*, Ann Arbor, 1958(上田明子訳: 文化と言語学, 大修館); 専門書としては U. Weinreich: *Languages in contact*, The Hague, 1964; J. C. Catford: *A Linguistic Theory of Translation*, London, 1965; E. Haugen: *The Norwegian language in America*, 1953, などがある。

さらにアメリカでは英語とその他の言語との比較・対照を目標とした文献はかなり多く、なかでも《*Contrastive Structure Series*》The University of Chicago Press や《*Applied Linguistics—A guide for teachers*》D. C. Heath and Company では英語とドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語などの比較が試みられている。